

レポート作成法の授業における協働学習の活用

ーグループディスカッションの試みー

坂本 香代, 工藤 未来

はじめに

東北大学附属図書館では、情報リテラシー教育の一環として、教員と共同で全学教育科目の授業を開講している。平成 23 年度までの活動については横山¹の報告に詳しいが、平成 24 年度においては、平成 23 年度に初めて実施して学生の評判も良かったグループディ

スカッションを 2 回に増やし、実施時期も早めるなどの改善を行った。

本稿では、このグループディスカッションを中心に、平成 24 年度における改善点とその成果・課題について報告する。

1. 授業構成・内容の見直し

全学教育科目・カレントトピックスの授業『レポート力』アップのための情報探索入門』では、平成 22 年度から図書館職員が担当する講義を 6 週分用意することで、より柔軟な授業構成が可能になった。しかし、平成 22 年度・平成 23 年度は従来の授業の流れを踏襲した「〇〇の探し方」という検索対象ごとの内容が多く、途中提出課題 1～2 から最終レポートへと課題を進めていく学生たちに、必ずしも寄り添っている内容とは言えなかった。

そこで平成 24 年度は大幅に授業構成を見直し、学生の最終レポート執筆に向けた進行状況に合わせた内容を目指した。具体的には、レポートで執筆するテーマを模索する内容の課題 1 提出までは、テーマ選びのための初歩的な資料の探し方を中心に教え、レポートのアウトラインを作成する課題 2 の提出に向けては、必要な要素の再確認や、より多彩な資料の探し方を教えることにした。各週の授業タイトルは表 1 の通りで、第 6～10 週と第 12 週が、図書館職員が担当した部分である。なお、第 5 週は大学祭、第 13 週はセンター試

験前日のため休講となった。

表 1 平成 24 年度の授業内容

第 1 週	大学図書館を使いこなそう
第 2～4 週	レポート作成法
第 6 週	レポート作成その前に
第 7 週	スタートで差をつけよう
第 8 週	図書だけじゃない！レポートに使える情報源（課題 1 提出日）
第 9 週	自分なりの着眼点を見つけよう
第 10 週	知の流れと広がりを感じてみよう
第 11 週	研究活動の実際と情報探索①（課題 2 提出日）
第 12 週	より良いレポートを目指して
第 14 週	研究活動の実際と情報探索②
第 15 週	まとめこれから大学図書館をもっと活用するために

この中で、課題 1 と課題 2 の中間点に当たる第 9 週と、図書館職員が担当する最後の週である第 12 週に、学生同士によるグループディスカッションを取り入れた。

2. グループディスカッション

2.1 導入の経緯

中教審の審議のまとめ「予測困難な時代において生

涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」²でも示されているように、学生の主体的な学びを促すア

クティブラーニングの取り組みが注目を集めている。

このアクティブラーニングの手法の1つとされるグループディスカッションについては、小野原・岩崎³のような活用事例が報告されている。『『レポート力』アップのための情報探索入門』においても、平成23年度の第14週の授業で試験的に取り入れた結果、平成22年度のグループ演習（3名のグループで検索課題に取り組むもの）より効果的だったことは、横山⁴の報告の通りである。

そこで、平成24年度はグループディスカッションの回数を2回に増やし、課題1と課題2を返却するタイミングでそれぞれ行うことにした。特に課題1を返却する第9週は、平成23年度にグループディスカッションを行った第14週より1ヶ月以上早い時期であり、この段階からグループディスカッションを行うことで、学生のレポートに対する主体的な取り組みが促進されることを期待した。

2.2 第9週のグループディスカッション

(1) 概要

1回目のグループディスカッションは、第9週の授業「自分なりの着眼点を見つけよう」の中で行った。この週は提出された課題1の返却日であるとともに、新たに課題2が課される日であったため、課題1から課題2への繋がりを意識した授業内容を目指した。

具体的には、まず前半で課題1のフィードバックを行い、レポートで扱う問題や着眼点を明確化させることの重要性を再確認した。次に中間部分でグループディスカッションを行い、課題1でそれぞれが考えた内容に対し、授業前半も踏まえてお互いにアドバイスをしてもらった。最後に後半では、課題2の内容と意図を説明し、予めアウトラインを作成してから執筆することの有効性を伝えた。

表2 第9週の授業構成

- | |
|--|
| 1. 扱う問題と着眼点
2. <u>グループディスカッション</u>
3. アウトラインの作成
4. 理解度チェックテスト、次回予告、解散 |
|--|

グループディスカッションの目的は、発表者にとっては自分の考えを整理することと、独りよがりな考えを修正することである。また、アドバイスする側にとっ

ては、様々な考えに触れるとともに、相手の進捗具合を知ることの良い刺激となると考えた。人数と時間配分については、内容が異なるため平成23年度との単純な比較はできなかったが、授業の中での時間配分からグループ3名、発表3分、意見交換5分とした。ディスカッションの手順は次のとおりである。

- ①授業開始前の課題1返却時にグループ分けを行い、3名のグループごとに着席してもらう。端数が出たら2名のグループも作る。
- ②前半の授業終了後、グループディスカッションの説明を行う。
- ③発表者は返却された課題1を基に、自分が考えた扱う問題と着眼点について、内容を3分間で説明する。最初の1分間は自分の考えをまとめるために使っても良い。
- ④発表が終わったら、他のメンバーから質問や意見をもらい、5分間で意見交換を行う。
- ⑤ディスカッションシートには自分が話した内容と相手からもらったアドバイス、または相手が話した内容と自分が伝えたアドバイスを、随時書き留めておく。ディスカッションシートは持ち帰って今後に活かす。
- ⑥発表者を交代し③～⑤をグループ全員分行う。

第9週の出席者は54名だったので、グループはちょうど3名ずつ18グループとなった。

(2) 結果

学生たちのディスカッションの内容を分析するため、ディスカッションシートは授業中に1度回収し、控えを取っておいた。これについて、「自分の考えが整理できていたか」「もらったアドバイスで考えが深まったか」「相手に適切なアドバイスができたか」の3点から検証を試みた。

ディスカッションシートは走り書きのようなものも多く、必ずしもディスカッションの内容を再現しているわけではないと思われるが、おおよそ以下のような傾向が窺えた。

- ・自分の考えが上手く整理できている学生は、他の点も良くできている。
- ・グループ内に良くできている学生がいると、他の学生もある程度良くできている。

1つ目は、自分がどのような問題を扱おうとしているのかきちんと説明できたため、的の絞れたディスカッションになったということだと考えられる。逆に、自分の考えが整理できていない学生の場合は雑多な内容のディスカッションとなってしまう、あまり考えを深められなかったようだ。2つ目については、授業内容をよく理解している学生が他の学生を先導する役割を担い、グループ内のディスカッションを活性化させたと考えられる。授業アンケートでもグループディスカッションでもらったアドバイスが最終レポートの執筆に役立ったという感想があり、グループにより差はあるものの、学生間で良い相互作用があったことが認められた。

また、大島⁵が指摘するように、学生はグループディスカッションのような学習者相互の活動を、授業の中で「楽しかったこと」と認識している。授業で用いているミニットペーパー（出欠確認や理解度チェックテストの回答、感想の記入が行える）の自由コメントでも、グループディスカッションについては総じて好意的なコメントが寄せられており、授業に対する意欲を向上させる効果もあったようだ。実際、第9週～最終週の出席率を平成23年度と比較すると、平均出席率は平成23年度の69.9%に対し、平成24年度は77.5%。最低出席率は平成23年度の50.0%に対し、平成24年度は69.8%と、目に見えて向上している。

これらの点から、第9週におけるグループディスカッションからは一定の成果が得られたと考えられる。

なお、この第9週の授業は、東北大学附属図書館ラーニングコモンズの完成直後ということで、ラーニングコモンズを使用した初めての授業でもあった。準備において試行錯誤する部分も多かったが、ラーニングコモンズの活用という点でも貴重な一歩となった。

2.3 第12週のグループディスカッション

(1) 概要

2回目のグループディスカッションは、第12週の授業「より良いレポートを目指して」の中で行った。第12週の授業は、引用の重要性を理解し正しく引用できるようになることと、レポート提出前にレポートに必要な要件や内容を再確認することを目的としている。必要な要素の確認や客観的なチェック方法の一つとして、授業後半にグループディスカッションを取り入れた。

表3 第12週の授業構成

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 引用とは 2. 正しい引用の仕方 3. レポートに必要な要件や内容の再確認 <ul style="list-style-type: none"> ・レポート構成の確認 ・最終レポート提出案内、評価ポイントの説明 ・<u>グループディスカッション</u> ・課題2のフォロー 4. 理解度チェックテスト、次回予告、解散 |
|---|

平成23年度の課題2を用いたグループディスカッションでは、時間をオーバーするグループがあるなど、ディスカッションの進み方にばらつきがあったため、時間配分の見直しを行った。平成24年度は発表準備の時間を設け、説明と意見交換の時間を明確に区別した。グループディスカッションの構成は次のとおりである。

- ①授業開始前の課題返却時にグループ分けを行い、2～3名のグループごとに着席してもらう。
- ②前半の授業終了後、グループディスカッションの説明を行う。
- ③2分間の発表準備時間で、説明する内容を各自まとめる。
- ④レポートのアウトラインについてまとめた課題2を基に、自分が執筆予定のレポートについて内容を5分間で説明する。
他のメンバーは、発表を聞きながらレポート内容の要点をディスカッションシートに記入する。
- ⑤発表が終わったら、他のメンバーから質問や意見をもらい、5分間で意見交換を行う。
- ⑥ディスカッションシートに相手へのアドバイスを書き、発表者に渡す。
- ⑦発表者を交代し④～⑥をグループ全員分行う。

レポートのアウトラインについて説明を行った後、メンバー間で意見交換することで、自分の考えを整理し、レポートに必要な要素を再確認する。さらに、メンバーからもらったアドバイスや意見は、今後の最終レポート執筆に活かしてもらう。第12週の出席者は52名で、18グループに分かれてグループディスカッションを行った。

(2) 結果

グループディスカッションは9週に続いて2度目だったことや、時間配分を明確にしたこともあり、全体的にスムーズに進めることができた。

グループディスカッションに用いる課題2には、図書館スタッフ2名のコメントが付与されている。また、今回の授業では、図書館スタッフが作成したサンプルレポートを配付した。これから本格的なレポート執筆を始める時期に入るということで、求められているレポートのレベルを理解してもらうことや、批判的に読んだり自分のレポートと比較したりすることでレポートの形式や構成・内容を確認してもらうことを目的としている。学生たちは、スタッフのコメントを取り入れたり、サンプルレポートと自分の提出した課題2を比較したりして、各自工夫しながら発表を行っていた。



写真1 グループディスカッション風景



写真2 アドバイスの記入風景

ディスカッションシートは第9週と同様に、授業中に1度回収して控えを取った。シートに記入されたアドバイスについて、大島⁶を参考に表1のように分類を試みた。その結果、全体の約半数が「根拠としてのデータがあるとよい」「難しい用語が多いので説明が欲しい」などの改善点の指摘であった。次いで多かったのが内容に対する質問や、内容や発表に対する評価で、それ

ぞれ約2割をしめた。中には、単語の羅列や感想などもあったが、全体的に具体的なアドバイスが多く、他者のレポートの改善に対して前向きに取り組む姿勢がうかがえた。

表4 アドバイスの種類

①	空欄/判読不能/文章になっていない
②	感想/アドバイスではないコメント
③	内容に対する質問(なぜ…なのか?/…とは?)
④	主張に対する意見(…には賛成だ)
⑤	情報提供, 提案(…を調べてみては)
⑥	修正点, 改善点の指摘(もっと…するとよい)
⑦	内容や発表に対する評価(流れは良かった)

2.4 来年度への課題

講義形式の授業の場合は、講義の終わりに実施する理解度チェックテストを用いて、設定した目標が達成できたかを評価している。グループディスカッションについても、何らかの方法で目標が達成できたかを評価したり、適切な実施方法や内容であったかを検証したりする必要がある。平成24年度は、簡単ではあるがディスカッションシートの分析を試みた。

しかし、自分が書いたものを相手に渡す形式の第12週に比べ、自分で持ち帰る形式の第9週では、他人に読まれるものという意識が薄かったせいかディスカッションシートの記述が全体的に粗く、詳細な分析が難しかった。今後は第12週の形式に揃えるとともに、ディスカッションシートの設計や分析方法も含めて、評価方法を確立していきたい。

また、第9週の結果からは、事前に自分の考えをまとめさせることの重要性も判明した。この点についても、第12週のように発表準備時間を用意するなどの工夫が必要であり、効果的なグループディスカッションの進め方を今後も検討していかなければならない。

2.5 グループディスカッションの感想

ミニットペーパーや、授業最終日に行う授業アンケートにおいて、グループディスカッションについてのコメントが学生から多数寄せられた。以下は寄せられたコメントの一部である。

(第9週)

- ・ディスカッションは緊張したけど面白かったです。
- ・自分の着眼点を見つけていくために、今回のグルー

プディスカッションはとても役に立った。自分とはまったく異なる意見が聞けてよかった。

(第12週)

- ・ディスカッションによって、自分の問題意識や着眼点をさらに整理する必要があると分かった
- ・直接他者の意見も聞けたので、大変参考になった。

(授業アンケート)

- ・グループディスカッションの相手が良く、アイデアをもらえてよかった。
- ・ディスカッションはレポートの内容を決めていく上で役立ちました。

3. 授業の評価

3.1 レポートの評価

図1～2に示すのが、平成23年度及び平成24年度における最終レポート(40点満点)の採点結果である。点数分布に大きな変化は見られないが、平成23年度に少数見られた10点台のレポートが、平成24年度では見られなくなった。授業全体の成績評価においても平成24年度は「AA」の割合が増えており、レポートの内容というよりは、学生の授業全体における取り組み方が向上したと考えられる。

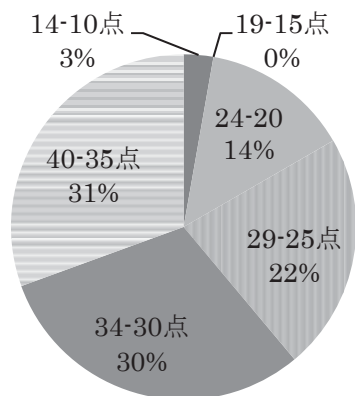


図1 レポートの点数分布(平成23年度)

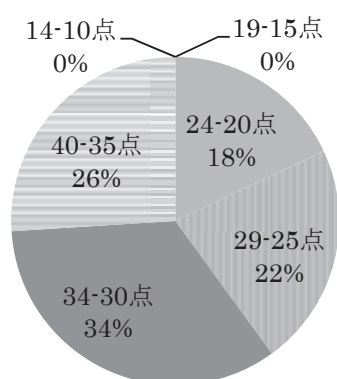


図2 レポートの点数分布(平成24年度)

3.2 授業アンケートの結果

授業の最終日には、受講生に授業アンケートを実施している。役に立った授業はどれか、という設問に対する回答の集計結果が図3～4である。第2～4週のレポート作成法に次いで、第8週や第9週、第12週が多く挙げられている。平成23年度と比較すると、グループディスカッションを行った授業が占める割合が高くなっていることが分かる。

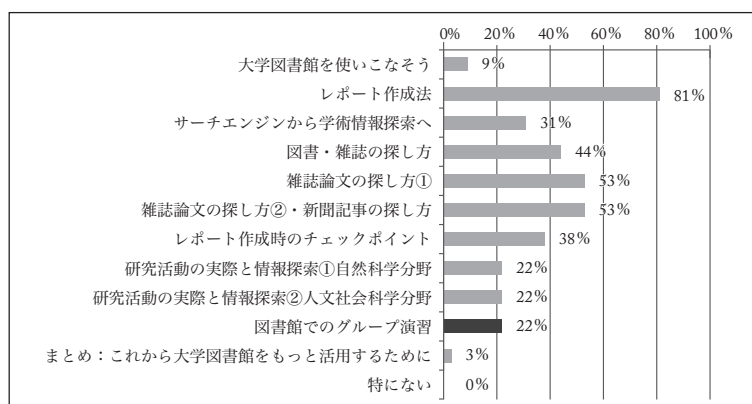


図3 役に立った授業(平成23年度)

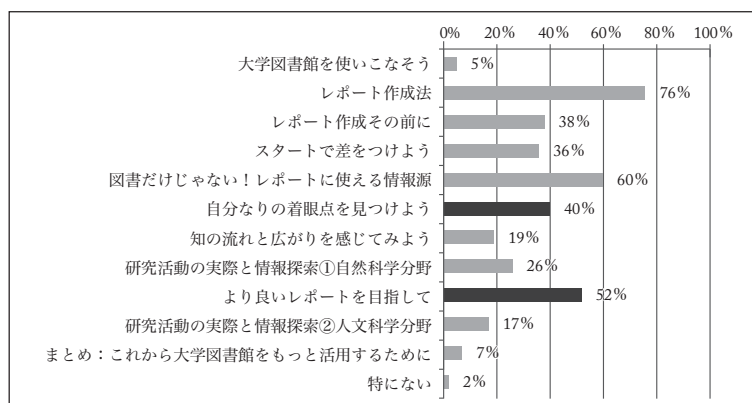


図4 役に立った授業(平成24年度)

おわりに

平成24年度は、よりレポートの作成過程に沿った授業構成を目指した。各回の授業内容についても、毎年改善を行い学習内容の定着を図っている。その中で、座学だけではなく図書館でのグループディスカッションを取り入れるようになり、レポート作成の過程全体

のレベルアップに貢献できたものと考えている。今後も文章表現技術や資料の検索スキルに加えて、グループディスカッションを通じて体験した学生同士での学び合いをもとに、レポート内容を振り返りレポート執筆へ活かすというサイクルを機能させていきたい。

引用文献

- 1 横山美佳. 東北大学生のための教育・学習支援. 「東北大学附属図書館調査研究室年報」. 2012, (1), p.47-54.
- 2 中央教育審議会大学分科会大学教育部会. 「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」(審議まとめ). <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/04/02/1319185_1.pdf>, (参照 2013-2-14)
- 3 小野原雅夫, 岩崎紀子. 講義型授業において学生の主体的学びを支援する試み. 「福島大学教育実践研究紀要」. 2004, (46), p.157-169.
- 4 横山. 東北大学生のための教育・学習支援. p48.
- 5 大島弥生. 大学初年次のレポート作成授業におけるライティングのプロセス. 「言語文化と日本語教育」. 2007, (33), p.57-64.
- 6 大島弥生. 大学生の文章に見る問題点の分類と文章表現能力育成の指標づくりの試み: ライティングのプロセスにおける協働学習の活用へ向けて. 「京都大学高等教育研究」. 2010, (16), p.25-36.

(さかもと かよ, 附属図書館医学分館運用係)
(くどう みらい, 大学院経済学研究科図書室)